

平成 30 年度
入 学 試 験 問 題

第 1 回

国 語

- 1 問題用紙は監督者の指示があるまで開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点や符号は一字として数えるものとします。
- 5 問題は 1 ページから 15 ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	--------	--

森村学園中等部

一 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

私たち脳の研究者は記憶の研究材料として「ネズミ」をよく使います。記憶力がもつとも優れている動物は人間ですから、なぜ人間を使わないのかという疑問をもつ読者もいるかもしれません、ネズミを使って実験するほうが好都合な部分もあるのです。たとえば、人とくらべてネズミのほうが純粹な記憶をしてくれるということが挙げられます。ネズミの記憶はほとんどが本能に根ざしたものですから、人間のように「今日はだるいな」「面倒くさいな」「早く終わらないかな」などということで記憶力が左右されません。昨日は覚えたけど今日はだめだと、このネズミは覚えるけど別のネズミはだめ、などという「気まぐれ」や「ばらつき」が少ないので、「記憶」という抽象的でとらえにくい対象を研究する場合、実験の妨げになる目に見えない要因が少ないということは、とても大切なことです。こうした理由で、私の研究室でも主にネズミを使用しています。

ネズミを使ったオペラント条件づけの方法を示しました。これはスキナー箱とよばれる装置です。この箱の中では、ブザー音が鳴ったときにレバーが押されると餌えさが出てくる仕組みになっています。簡単なテストなのですが、さすがに何回か訓練を積まないと学習できません。そして、この箱に入れられたネズミがどのように学習していくかを観察していると、とてもおもしろい事実が見えてきます。

当然、ネズミにとつてスキナー箱は生まれて初めて見るものです。目の前のレバーがなんの役割をしているのかは知りません。そもそも、レバーは押すものであるということさえも理解していないのです。**I**、突然ブザー音が鳴つたりします。まさに、戸惑うばかりの部屋です。そんなとき、偶然にレバーが押されて、おいしい餌が出てきます。初めは単なる偶然です。しかし、この偶然が何回か続くと、「レバーを押すこと」と「餌をもらえること」の因果関係に気づきます。ここまでが学習の第一段階です。



オペラント条件づけ

② この段階まで到達すると、ネズミは餌欲しさに、ひたすらレバーを押します。**II**、レバーを押したからといって必ずしも餌にありつけるわけではありません。ブザーが鳴っていないときにはレバーを押しても餌が出てこないからです。何度か失敗を繰りかえすうちに、ようやくこの事実に気づきます。そして、ついにブザーとレバーの因果関係を理解して、ネズミのオペラント学習が完成します。何十回、何百回という試行錯誤を繰りかえして、ネズミはこの課題を記憶するのです。

この過程でネズミは数多くの失敗をします。ああでもない、こうでもない、とさまざまに失敗をして、その結果、ブザーとレバーの関係

に気づくのです。つまり、ひとつの成功を導きだすために、多くの失敗が繰りかえされるわけです。逆に、こうした数多くの失敗がなければ正しい記憶はできません。つまり、記憶とは「失敗と A」によって形成され強化されるものなのです。

これはコンピューターとはかなり異なります。コンピューターは一回で完全に記憶できます。しかも正解だけを完璧に覚えるのです。脳ではそうはいきません。正解を導くためには試行錯誤が絶対に必要です。失敗をして、それを基礎としてつぎに何をするかを考え、そしてまた失敗をして……という具合です。⁽³⁾脳の記憶とは、いわば「消去法」のようなものです。これはちがう、あれはちがうと試行していくのです。

つまり、覚えるということは「努力と根気」なのです。ここまで読んで「結局そうなのか」「楽はできないな」と落胆した読者もいるかもしれません。確かに、その通りです。しかし、このオペラント課題⁽⁴⁾で、ネズミの学習を早くすることはできます。それは手順を分解する方法です。私の研究室では、オペラント課題を不ズミに与えるとき、段階ごとに分けて覚えさせるという方法をとります。つまり、いきなりスキンナー箱の中にネズミを入れてブザーを鳴らし、因果関係を覚えさせようとしてもそう簡単には覚えてくれません。III、まずブザーとは関係なく、レバーを押しさえすれば餌が出てくるようにし、これを完全に覚えさせます。そして、つぎに、餌をブザーと関連づけます。このようにすれば、ネズミの学習が格段に早くなります。つまり二つのことを同時に覚えるのではなく、ひとつひとつの段階に分けて覚えれば、学習効率がよくなるということです。

この点もまたコンピューターとは異なります。コンピューターは、たとえ多段階の手順でも、一回の保存で完全に記憶できます。しかも正確無比です。一方の脳は、試行錯誤をしながらひとつひとつ手順を踏まねばうまく記憶できません。こうして考えるとコンピューターのほうが優れているような気がしてきます。そして、私たちの脳がどうして消去法などという愚鈍な学習形態をとっているのかと、悔しくさえなってきます。しかし、脳のこの性質にはじつに深い理由があるのです。まず、この理由を理解することが重要です。

ここで、⁽⁵⁾オペラント課題を習得した不ズミに少し意地悪をしてみましょう。ブザーの音の高さを変えてみるのです。たとえば、訓練中は音階「ド」の音を聞かせていたとします。そして、あるとき突然、それより少し高い音である「ソ」のブザー音を聞かせます。すると、どうなるでしょうか。じつは、ネズミは何事もなかつたかのように、「ソ」のブザー音にも反応してレバーを押します。つまり、このネズミは、あくまでも「ブザー音」に反応していただけであって、それはド音でもソ音でもかまわなかつたというわけです。

しかし、コンピューターでは状況が異なります。コンピューターにとつてはドとソでは大ちがいです。ヘルツ数にすると一・五倍もちがうのです。ですから、ネズミと同じようにコンピューターに「ドの音が鳴つたときにレバーを押しなさい」と教え込むと、ソの音が鳴つても反応しません。したがつて、コンピューターとくらべると、脳の記憶はかなりおおざつぱで曖昧であるといえます。ドでもソでも区別しないのですから。

たとえば、私が飼い犬に「お手」という芸を教えます。この芸を覚えた犬は、別に私が「お手」といわなくても、誰か他の人に「お手」

といわれれば前足を差し出します。声色は誰でもよいのです。こうして考えると、一般に記憶とは決して厳密なものではなく、かなり曖昧でいい加減なものであるといえます。*アジー記憶とよんでもよいかもしません。じつは、これが脳の記憶の「本質」なのです。

この曖昧さは、生命にとつてきわめて重要な意味をもっています。なぜなら、生活している環境は日々刻々と変化しているからです。たとえば、初対面の人会つたとき、その人はきれいな髪に水玉のリボンをつけて紺のワンピースを着ていたとします。しかし、つぎに会つたときには同じリボンとワンピースを身につけている保証はありません。もしかしたらパーマさえかけているかもしれません。もし、これらすべてのものを厳密に記憶したとしたら、再会したときにその人は別人として認識されてしまいます。これでは困ります。ですから、記憶には厳密さよりも、むしろ、曖昧さや柔軟性が必要とされるのです。

(中略)

しかし、脳にも厳密な記憶というものが無いわけではありません。たとえば、遺伝子にプログラムされている絶対的な記憶です。「本能」といつてもよいかもしません。暖かくなつたら冬眠から目覚めるカエル、七年経つたら変態するセミ、ウグイスに育てられても南にわたるホトトギス、乳を含ませれば母乳を吸う乳児。これらもいわば記憶です。こうした本能にもとづいた記憶には柔軟性がありませんから、あらかじめ予定された環境でしか役に立ちません。ガンやアヒルのひなが初めて目に入つた動くものについて歩くという「ローレンツ刷り込み」という有名な現象も、初めて見たものが親鳥であるという想定のもとで初めて意味のある記憶となります。たまたま近くを通りかかつたのがヘビだつたら、とんでもない悲劇がおこるでしょう。

このように、記憶に柔軟性が備わっているということは、生命にとつてきわめて重要なことなのです。そして、進化論的に下等な動物ほど、厳密な記憶の割合が多く、ファジーな記憶が少なくなるという傾向があります。下等な動物ほど失敗しても学習せず、結局は命を落としてしまう場合が多いのです。逆に、私たち人間の脳にはきわめて大きな柔軟性が与えられています。ですから、何度、失敗してもそれを活かして成功に導くことができます。これは私たちの脳に与えられた「権利」なのです。

こう考えると、失敗や間違まちがいは臨機応変にものごとに対応するための「汎化」*はんかという大切なはたらきと表裏一体であつて、ある程度はやむを得ないということが理解できます。何でも正確に記憶して、いつまでも忘れないのが優れた脳であるという認識はあらためなければいけません。コンピューターのような正確無比な脳は「脳」としては役に立たないので、人間とは忘れたり間違つたりするものなのです。その弱点を補うために、人は、コンピューターや文字を発明し開発したにすぎません。

(池谷裕二『記憶力を強くする』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

* 愚鈍(ぐどん)……頭の働きが悪いこと。

* ヘルツ……一秒間あたりの振動回数を表す周波数の単位。

* ファジー……人間の感情、判断などに伴う曖昧さのこと。

* 汎化(はんか)……さまざまな対象に共通する性質や法則を見出すこと。

問一

—— ① 「私たち脳の研究者は記憶の研究材料として『ネズミ』をよく使います」とありますが、「ネズミ」がよく使われるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ネズミは人間と比べて、抽象的でとらえにくく対象への記憶力に優れているため。

イ ネズミは人間と比べて、様々な条件によって記憶力に影響を受けることが少ないため。

ウ ネズミは人間と比べて、さまざまな物事をより正確かつ純粹に記憶してくれるため。

エ ネズミは人間と比べて、個体ごとの違いが全くなくデータを取るのが簡単なため。

問二

—— I から III に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ たとえば

エ ですから オ しかも

問三

—— ② 「この段階」とありますか。どのようないい「段階」ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 箱の中のレバーが押され初めて餌(えき)が出でてきた段階

イ レバーを押すと餌が出てくる偶然(ぐうぜん)が何回か続いた段階

ウ レバーを押すと餌が出ることにネズミが気づいた段階

エ 箱の中のレバーの役割をネズミが理解した段階

問四

—— A に当てはまる語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 事実

イ 正しさ

ウ 繰りかえし

エ 過程

——(3)「脳の記憶とは、いわば『消去法』のようなものですが」とあります。これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 脳の記憶は失敗の繰りかえしの中で強化され、次に失敗をしてもそれにくじけなくなるものだということ
 イ 脳は失敗した過去の経験を記憶から消去することで、徐々に成功へと近づいていくものだということ
 ウ 脳は失敗した時の悔しさを記憶し、それを次への試行のエネルギーに変えていくものだということ
 エ 脳は失敗を繰りかえすことのないように記憶し、それを元にまた思考していくものだということ

問六 ——(4)「段階」とに分けて覚えさせるという方法とあります。このような方法をとるとネズミの学習が早くなるのはなぜですか。その答えとなる次の文の()に当てはまる言葉を本文中から二十五字以上三十字以内で求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

【解答】()から。

問七 ——(5)「オペラント課題を習得したネズミに少し意地悪をしてみましよう」とありますが、筆者がこのような「意地悪」をした

意図は何ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア コンピューターの性能のすばらしさを明らかにする意図
 イ ネズミが音程を理解できないということを証明する意図
 ウ ネズミの記憶力がそれほどよくはないことを示す意図
 エ 脳の記憶には柔軟性があるということを確かめる意図

問八 ——(6)「記憶に柔軟性が備わっているということは、生命にとってきわめて重要なことなのです」とあります。このように言えるのはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九

- 次のA～Dのうち、「脳」の特徴に当たるものには「1」を、「コンピュータ」の特徴に当たるものには「2」を、「脳」「コンピュー
ター」のどちらの特徴にも当たらないものには「3」を記して答えなさい。
- A 手順が多くなつても一度で正確かつ完全に記憶することができる。
 - B 音程や音階などといった音の細かな違いを理解することは難しい。
 - C 多段階に手順を分けることによつて完璧に記憶できるようになる。
 - D 柔軟性の備わつている記憶と本能にもとづく記憶をあわせもつてゐる。

二 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

父親との関係に悩む中学三年生の「夏芽」（わたし）は、友人からの勉強合宿の誘いを断り、田舎のお寺でのサマーステイに参加する。そこでは、住職の「タケじい」、その娘でお寺を切り盛りする「美鈴さん」、そして、住職見習いで修行中の「穂村さん」らが迎えてくれたのだが、サマーステイの参加者は「夏芽」ただ一人だった。「夏芽」がお寺にやつてきたその日、お寺の物置に隠れていた男の子が見つかる。それは五歳の「雷太」で、何やら家庭の事情を抱えているらしく、一人でお寺にもぐりこんでいたのであった。

——しろやぎさんから　おてがみついた。

くろやぎさんたら　よまずにたべた。

雷太が朝からご機嫌で歌っている。

よく晴れた、絶好の川遊び日和だった。

（中略）　サマーステイのイベントのひとつとして、今日は川遊びに行くことになつていて。

わたしは手を伸ばし、川の水をすくつた。冷たい零^{しづく}がひじまで流れおちる。ふと、人間の体はほとんど水でできている、という話を思ひだした。

このきれいな水と、わたしのなみを、ぜんぶ取りかえられたらいのに。

「なつめー、ほら」　ふいに声がして、目の前に小さな手に握^{にぎ}られた川虫が突きだされた。「ぎやあ」と叫ぶと雷太は驚いた顔をして、それからげたげたと笑つた。

「……はくちつ」

風が吹いて、雷太がくしゃみをした。Tシャツがずぶ濡れになつていて。「ほら、風邪ひくよ」着替^{きかへ}えさせようと裾^{すそ}をめくつて、ふと手が止まつた。

「——雷太くん、これ着ようか」

いつのまに来たのか、穂村さんがゴム入りのラップタオルを持つてきて頭からすぼつと被せた。慣れた手つきですばやくシャツを抜^ぬきとりながら、わたしに向かつてそつと目だけでうなずいてみせた。

わたしが初めてこの寺に到着した日、それはつまり、隠れていた雷太が見つかったあの日。そのときから、雷太の体には、いくつかのあざや火傷の跡があつたのだという。

川に遊びに行つたその晩、疲れた雷太がぐっすり眠つてしまつたあと、穂村さんと美鈴さんとタケじいが、三人で相談したうえでわたしにも話してくれた。初めて気づいたのはお風呂に入れたときで、丸くたばこを押しあてられたような跡があつた。火傷のほうはほとんど薄くなつていたけれど、あざはまだ新しいものだという。

「たぶん、強くつねられた跡だと思う。……本当に、申し訳ない。まだ中学生のきみに、こんなことを聞かせるべきじゃないんだろうけど」わたしは黙つてうつむいて聞いていた。

どんな顔をすればいいのか、どう返事をすればいいのかもわからなかつた。

「怖がらせて本当にごめん。でも、彼のことは、これからぼくたちみんなでちゃんと責任をもつて引き受けるから。雷太くんがこれ以上同じ目に遭うことにはけつしてない。だからきみは、なにも心配することはないんだよ」

「ごめんね、夏芽ちゃん。悲しい思いをさせてしまつたね」

穂村さんと、美鈴さんと、ふたりそろつてわたしに深く頭を下げてきたので、それにも驚いた。

「……わたしは、どうしたらいいですか」

わたしに、なにができるだろう。

「なんにも」

美鈴さんが優しく笑う。穂村さんもうなずいた。

③
【でも
はき違えてはいかんよ】

タケじいだつた。

「べたべた優しくすることはない。同情もいらん。ふつうにしていなさい。あの子はもう守られている。——間違つても、あんた自身が、

引きずられてはいかんよ」

タケじいはそれだけ告げると、どれ、また布団を蹴とばしてないかな、と奥の部屋に行つてしまつた。

(中略)

八月十三日、お盆の初日であるせいか、その日はとりわけ訪問客が多くつた。雷太はいつものように、ヤギたちのところへ逃げてしまつていた。境内の目につく場所の除草はすでに終わり、今はもっぱら裏山のほうに移動していた。やつかいことが起きたのは、そんなときだつた。

「……ねえちょっと、なあに、あのにおい」

お墓掃除に来たついでに境内をうろついていたらしい女の人が、本堂に戻ってきた。「あの、奥のほうにある小屋。いつたいなんの動物がいるんですか?」ハンカチで鼻のあたりを覆つていてる。

「ああ、ヤギをお借りしているんですよ。草を食べてくれるんです」

美鈴さんがこやかに答えた。「お掃除はこまめにしてあるはずなんですが……」

「そうですか?でも、ひどいにおいですよう。……あれじや、亡くなつたおじいちゃんも顔をしかめてるんじやないかしら」

その声はわたしたちのいる台所にまで響いてきた。葉介がさつと立ちあがり外を見にいく。じつを言うと、少しだけ心当たりがあつた。雄ヤギの、ビンゴだ。どうしても雌に比べていろいろにおいがきついらしい。

わたしたちがたどりついたのと、その女人人がみんなをぞろぞろ連れてきたのと、ほとんど同時だつた。

「ほうら、ね。ひどいにおいでしょ」

そうだろうか。言うほどひどくは感じなかつた。ただ、学校によくある飼育小屋くらいの感覚だつたが、それでも慣れていない人には気になるのだろう。

「それは、ご不快にさせて申し訳ありま——」

美鈴さんが言いかけたときだつた。なにか黒いものがばらばらと飛んできた。

「——くさくないもん」

雷太だつた。木の陰から顔をのぞかせていてる。

「『』どうさんも、ビンゴも、クララも、きれいだもん。ヤギのふんも、くさくないもん。えいようだもん

「きやつ。なにこれ」

雷太はさらに黒い粒をばらばらと投げつけた。

「あつちいけ。ぶたばばあ」

「雷太つ」

美鈴さんが声をあげる。騒ぎを聞きつけ、穂村さんもやつてきた。雷太がぱつと駆けだした。わたしもすぐにあとを追う。後ろで、怒る

女人を懸命になだめる声がした。

その晩、穂村さんと美鈴さんが、雷太を連れて昼間の女人のところへお詫びに行くというので、わたしもついていくことにした。あの霧廻気だと、またいろいろ言われてしまうかもしれない。謝るのなら、いつしょに謝ろうと思つた。

ところが、彼女が滞在しているという^{*だんか}檀家さんの家を訪ねると、意外なことにわたしたちはていねいに迎え入れられた。

「まあまあ、わざわざ恐れ入ります」

出迎えてくれたのはもともとその家に住んでいたひとり暮らしのおばあさんで、息子さんと、その奥さんと子どもたちとが帰省してきているらしい。

「小さい子どもさんのしたことなんだから、そんなに□くじら立てんでもお」

お寺さんにこんなことしてもらつてはかえつて申し訳ない、とおばあさんはそう言つて、持参した菓子折りも受けとろうとしなかつた。

「いえ、こちらこそ、目配りが足りませんで……」

申し訳ありませんでした、と美鈴さんたちが謝罪するのに、昼間の女人はどことなく居心地悪そうな顔で座つていた。

「いえ、そんなべつに……」言いながらちらりと雷太のほうを見やる。

この家のお嫁さんだというその人は、由美香さん^{よみか}といいう名前だった。小ぎれいな格好をして、なるほど雷太の言うとおり、ちょっとだけずんぐりしている。

「坊は、毎日ヤギさんのお世話しとるんだつて？ えらいねえ。ああ、お菓子好きかね？ ほら、これ持つておいで」
おばあさんが手近な袋にスナック菓子をいくつも詰めはじめる。人見知りの雷太はぎゅっと下を向いていたけれど、わたしはほつとしていた。

「いえ、そんな」と美鈴さんが遠慮すると、おばあさんは「いいんですね。ほら、遠慮せんで」と袋を手渡してきた。もらつたお菓子の袋を抱え、それでも雷太がちよつと嬉しそうにわたしを見あげてくる。よかつたね、と小声で言つと、うんとうなづいた。

「……でも、お寺さんもたいへんですね、こうしていろいろ人助けなさつたりして」

たいへん、の部分に器用にため息を織りませながら、由美香さんが言つた。

ふと見ると、ふすまの隙間^{すきま}から小学生くらいの兄妹が顔をのぞかせていた。彼女の子どもたちなのだろう。小さく笑いかけると、びしやんと戸を閉め、ぱたぱたと走り去つていく。
頭の芯^{しん}がすつと冷えた。

——今のは、聞き違ひだろうか。くすくす笑いの合間に、「ステゴ」という言葉が聞こえた気がした。

「この子はお寺でお預かりさせていただいているだけです。なにも特別なことはありませんよ」

穂村さんが穏やかに説明したが、由美香さんは聞いているのかどうか、物思わしげに頬に手を当てた。

「ほんとに、ねえ。そりや、子どもを育てるのはたいへんですよ、こんな時代ですもの。しつかり教育を受けさせて、ちゃんとした子に育てようと思ったら、お金も時間もうんとかかるし。若い親御さんには□に余ることもあるかもしれないけど——。それにしたって、ねえ。

こんな小さな子を……」

ふたたびため息が交ざる。こおんな小さな子を――。

(6)わたしは膝の上でぎゅっと手を握った。頭のなかは、さつきからずつとひんやりと冷めたままだった。早く帰りたい、と思つた。

「でもね、いつかはきっと、よくなりますよ、この子もお母さんも。大丈夫、だつて、子どもは天からの授かりものだもの。それを愛さない親なんていない。そうでしょう?」

由美香さんの視線の先には、七五三の子どもたちの写真がフレームに入つて飾られていた。ちまちまとお茶を取りかえるおばあさんの隣で、由美香さんはいとおしそうに我が子の写真をながめている。

「うちではね、いつも言つてるんですよ、あの子たちに。お誕生日とか、そういう特別な日には、必ずね。――うちの子に生まれてきてくれてありがとうございます、このパパとママを選んで来てくれて、本当にありがとうございます――って」

そのとき静かな声がした。

「――なるほど。あなたはそのようにお考えなのですね」

穂村さんだつた。組み合わせた指にじつと目を落としている。

(7)親として、お子さんがたを愛し、慈しんで育てておられる。とてもすばらしく、尊いことです。――でも――その声にふと力がこもる。

「子どもが自分で親を選ぶことなど、ありませんよ」

穂村さんは静かに立ちあがつた。

「そろそろ、失礼いたします」

美鈴さんも席を立ち、わたしも雷太の手を取りあとにつづいた。ちらりと盜み見た由美香さんは、鼻白んだ顔をしていた。しきりと遠慮するおばあさんにお菓子の包みを渡し、わたしたちはおいとました。

(市川朔久子『小やぎのかんむり』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) * 檀家……お寺の墓を利用したり葬儀を頼んだりして、そのお寺にお布施などの援助をする家。

問一

——①「わたしに向かつてそつと目だけでうなずいてみせた」とありますが、「穂村さん」がこのような態度を見せたのは、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「雷太」を着替えさせようとして手間取っている「わたし」の様子を見て、自分の手際^{てぎわ}の良さを示そうとしたため。

イ 「雷太」が風邪^{かぜ}をひかないようにと「わたし」が気を配っているのを見て、そのやさしさに感謝の気持ちを伝えるため。

ウ 「雷太」を着替えさせようとしてふと手を止めた「わたし」の様子を見て、「わたし」の動搖^{どうよう}を感じとったため。

エ 「雷太」のことは自分もまた氣を使っているのだと「わたし」に合図を送って、互い^{たが}の連帯感を確認しようとしたため。

問二

——②「ふたりそろつてわたしに深く頭を下げてきた」とありますが、「穂村さん」と「美鈴さん」が「わたしに深く頭を下げてきた」のは、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「雷太」の体にあるあざや火傷^{やけど}の跡^{あと}を自分たちだけは知つていながら、今まで「わたし」に隠^{かく}していたことを謝ろうとしたから。

イ 「雷太」が虐待^{あやくち}を受けるような家庭の中で育つってきたことは、決して他の人には言わないでほしいと「わたし」に頼みたかったから。

ウ 「雷太」のあざや火傷の跡^{あと}を「わたし」が知つてしまつても、怖^{こわ}がらずに「雷太」の世話ををしてほしいとお願いしたいから。エ 「雷太」が家族から虐待を受けているという生々しい話を聞かせて、「わたし」の多感な心を傷つけるかもしれないと思づかったから。

問三

——③『はき違えてはいかんよ』とあります、「タケじい」は、「わたし」にどのようなことを伝えたかったのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」が「雷太」に気を使うあまり、サマースティを楽しめなくなつてはならないということ

イ 「雷太」の傷ついた心をいやすためには、「わたし」が「雷太」に厳しく接しなければならないということ

ウ 「わたし」が「雷太」をかわいそうに思つても、今まで通りの「わたし」でいなければならないということ

エ 「雷太」と「わたし」とはあくまで他人なのだから、人の家庭のことに出ししてはならないということ

問四

——④「もともとその家に住んでいたり暮らしのおばあさん」とありますが、この「おばあさん」は、ここでは、どのような人物として描かれていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア わざわざお寺さんが訪ねてきたことに必要以上に恐縮している、気弱な人物
 イ 檀家の一員として昔からお寺さんを敬っている、人のよい、やさしい人物
 ウ 子どものいたずらや嫁のいらだちなどに気づかない、おおらかな人物
 エ 帰省してきた息子夫婦との関係が悪く、周囲の顔色をうかがっている人物

問五

~~~~~ I 「□くじら（を立てる）」、II 「□に余る」はいずれも慣用表現ですが、それぞれの空欄に入る言葉を【A群】から選び、また、意味として近い言葉を【B群】から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。

- |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|
| 【A群】 | ア □  | イ 目  | ウ 足  | エ □  | オ 手  |
| 【B群】 | a 非難 | b 負担 | c 興奮 | d 無礼 | e 冷静 |

問六

——⑤「わたしはほつとしていた」とありますが、「わたし」が「ほつとし」たのは、なぜですか。その理由を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問七

——⑥「わたしは膝の上できゅっと手を握った」とありますが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 「穂村さん」の言葉に耳を傾けようとせず、「雷太」の状況に対してトゲのある言ひ方をする「由美香さん」の態度に、いたたまれない気持ちになっている。  
 イ 「雷太」は親から捨てられたかわいそうな子どもだと□では同情しながら、腹の底では別のことを考えている「由美香さん」の真意がどこにあるのかを、冷静にさぐろうとしている。  
 ウ 親から捨てられた「雷太」に比べて自分の子供がいかに幸せか得意そうに語る「由美香さん」の態度に腹を立て、その怒りが爆発しそうになるのを感じとこらえている。  
 エ 「雷太」からヤギのふんを投げつけられたことを根に持ち、ねちねちと嫌味を言い続ける「由美香さん」の態度に反発を感じながらも、事態を悪化させまいとがまんしている。

——⑦『子どもが自分で親を選ぶことなど、ありませんよ』とあります、「穂村さん」は、どのようなことを言おうとしたのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもは、どんな親のもとに生まれてきたとしても、その親のことを心から愛しているものなのだということ  
 イ 子どもはだれでも、自分から親を選ぶことができないのだから、親が精一杯子どもの面倒を見なければならないのだということ  
 ウ 子どもはだれでも、与えられた環境を甘んじて受け取り、その中で懸命に生きようとしているのだということ  
 エ 子どもは、最初から親子のきずなを知っているわけではなく、親に育てられていく中でそのきずなを深めていくのだということ

この小説の内容や表現についての説明として、適当でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 冒頭の「やぎさんゆうびん」を「雷太」が歌う場面には、ほほえましさの中に、「雷太」のヤギたちへの思いが感じられる。  
 イ ヤギの世話を任された「雷太」が、ヤギを守ろうとするあまりに取った行動が、後半のエピソードのきっかけとなっている。  
 ウ 幼い「雷太」の無邪気な様子をときに愛らしく描きながらも、その背後に虐待や育児放棄といった深刻な問題をのぞかせている。  
 エ 田舎に暮らす純粋でそぼくな人々と都会からやつってきた人々とを対照的に描くことで、その価値観の違いを読者に訴えている。  
 オ 「雷太」を守ろうと懸命になつて登場人物の一人一人の内面に焦点を当て、その心の動きをていねいに描き出している。  
 カ 「わたし」という一人の少女が体験した出来事やその時々の思いが、一貫して「わたし」の視点から描かれている。

三 次の——部①～⑧のカタカナを漢字に直し、——部⑨～⑫の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

フツキン運動をやりすぎて、おなかが痛い。

かれ 彼はいつも三角ジヨウギを使って直線を引く。

息子の作ったハイクに思わず、なみだが出た。

祖父がショゾウする器は千をこえる。

子どものころはキシベでよく遊んだ。

彼はタテヨコななめの長さを計った。

かのじょ 彼女とは会ったその日にイキ投合した。

彼の意見に異議をトナえる者はいなかつた。

街路樹のつぼみもそろそろふくらむだろう。

私は作法を祖父からしつけられた。

うそも方便とはよく言ったものだ。

実るほど頭を垂れる稻穂かな